



# だいや川通信

今市の水を守る市民の会

第34号

2013年2月20日(水)

ともうみ

## 共生の世を



東日本大震災から二度目の正月を迎えました。あの衝撃的な映像は今も脳裏に焼き付けられたままです。復興が進んでいるとはとても思えませんが、そのような状況の中でも現地の人々は力を振り絞って将来への光を見出そうとしています。その原動力になっているのがその土地に昔から伝えられてきた祭りでした。家内安全・豊漁豊作を祈る東北地方の祭りは、神の使者である動物達をも繰り出したカラフルなものが多く、実にたくさんの不思議な祭が残っているそうです。今回の大津波では祭りの担い手が亡くなり、道具類を喪失した村々も多かったと聞きますが、亡くした仲間を悼み、復興を祈って各地で祭りが再開されたそうです。

昔から私達日本人は、大災害に見舞われるたびにその地の祭りを引き結び、困難な状況を乗り越えてきました。今回の大震災においても、日本各地から多くの手が差しのべられたのは祭りの持つ力に促されてのことと思います。

「死をみつめて生きる」の著者(上田正昭 京大名誉教授)は、自然との共生を「ともいき」ではなく「ともうみ」であるという論で説かれています。「古事記」の「国生み神話」では「共生」を「とも生み」と訓(よ)んでいることと、先生が学生時代に強く影響を受けた寺田寅彦の「日本人の自然観」がそのベースになっているようです。「私達は欧米科学を過信し信奉しすぎてきた。(中略)自然と調和し、自然をあがめて共に生き共に生みだす知恵と体験を蓄積して発達してきた日本人のくらしのありようや日本の本来の学問のありようを、いま一度想起すべきではないか。」と述べられています。

「きょうせい」でも「ともいき」でもなく、「ともうみ」という言葉。柔らかく、やさしく包み込むこの響きは、つなぎ合って新しいものを生み出してゆくエネルギーを連想させてくれる言葉です。

自然を失くした都会からは新しい力は生まれません。地方が都会を支えていることに大きな誇りを持つことがこの国を生き返らせる力になっていきましょう。各地で生産される農産物・海産物は、近年、物流の発展によって日本国中どこにでも届けられるようになりました。都会に迎合するのではなく、地方からの独自の発信が日本中を元気にする源になっていくことに期待をしています。

今市が誇れるものとは何でしょう。それは里山の暮らしに息づく「素」です。森であり水であり、田畑であり、人々の活発な生活力でありましょう。当会では今年も今市独自の良さを発見する催しを出来るだけ多く企画・実行していきたいと思えます。皆さんがたくさん「今市」を発見し、多くの人達にそれらを発信する機会としてとらえていただければ幸いです。今年もよろしくお願ひいたします。

(塚崎)

## 目次:

共生-ともうみ-の世を	1
生物多様性を考える	2
奥日光ミーティング	3
報徳会館まつり	3
薪ストーブの灰	4

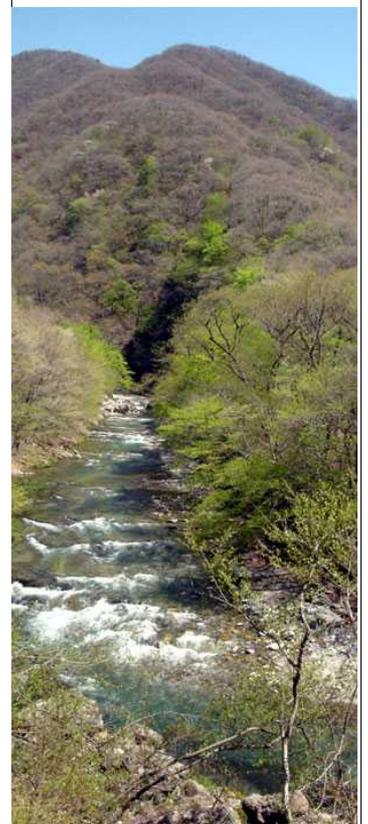
## お知らせ

次回の定例会

2013年2月27日(水)

日光市民活動支援センター

午後1時~2時



写真は2010年5月8日の湯西川です。

明るい春の光の中に、一斉に芽吹きはじめた山々、山が蓄えた水が川となって下っていきます。

サンショウウオも見つかりました。しかし、現在、この光景を見ることはできません。

ダムのために消滅しました。皆さんの心のアルバムに、しっかり貼ってください。



## 「生物多様性」を考える

写真：小代農地水保全会生き物調査（2012年7月22日実施）

最近、下野新聞で「生物多様性の主流化」と言うことが話題になっていた(2013年1月20日付日曜論壇)。青木章彦氏のその論説によると、これは昨年9月に閣議決定された「生物多様性国家戦略2012—2020」の中に出てくる言葉だそうである。すなわち「生物多様性の保全と持続可能な利用の重要性が、国、地方自治体、事業者、NPO、NGO、国民などの様々な主体に認識され、それぞれの行動に反映される」ことを「生物多様性の主流化」とうたっているのだと言う。ちょっと、こなれていない、極めて漠然とした表現であるが言いたいことはわからぬでもない。

かつて「シモツケコウホネと里を守る会」がコウホネと田んぼ周りの生き物の保全を求めて小代の圃場整備事業に意見書を提出した時、私たちが苦しまぎれながらも、その論拠としたものの一つは、92年の地球サミットで採択された生物多様性条約にあった。すなわちその条約の署名国でありながら国の事業として行われる圃場整備においてその条約趣旨が十分に尊重されているとはいえないのではないかという点であった。それから8年近くが過ぎたがその頃から比べると、生物多様性という言葉は広く遣われるようになってきている。そうした中で今回、条約締結国であれば最初から当然であるはずの「様々な主体に意識され、それぞれの行動に反映される」必要性が20年近くたって、やっと成文化されたという事になる。この時間の長さをどうとらえるかによって評価は分かれよう。だが、とりあえずはこれまでの取り組みへの反省から、わが国における生物多様性への取り組みを一段進めようとする動きとしてみておきたいと思う。(ただ心配なのはこの「主流化」などという漠然とした表現が「生物多様性」を再びお題目にしてしまうのに、ぴったりのような気がするのだが・・・)いずれにしてもこうしたことを踏まえて、小代の圃場整備事業での最近の生物多様性への取り組みについて若干、紹介しておきたい。

本年1月に行われた、この事業に関する「環境配慮整備検討会」において、上都賀農業振興事業所が実施した、同地区の田んぼの生き物についてのモニタリング調査結果が公表された。「全体調査(内容は総延長約500

mの生態系配慮工法区間と一般工法区間の魚類の調査)」「カエルの幼体調査」、それに水田魚道工の改善に関する追加調査などである。内容的にかなり限定されたものであるが、圃場整備終了後の調査として極めて貴重なものだと思う。これによると全体調査では全ての調査区間でシマドジョウの採捕割合が高い。スナヤツメが全調査区間で確認された。その中でも生態系配慮工法区間と一般区間を比較すると前者の区間においてシマドジョウの占める割合が高いなどの結果が得られた。

また、カエルの幼体調査では排水路を暗渠にしたり、フタをするなど配慮工法を取った区間ではニホンアマガエル、ニホンアカガエル、トウキョウダルマガエル、シュレーゲルアオガエルが確認され、ニホンアマガエルしか確認されなかった一般工法の区間とはその効果ははっきりと確認できる結果となっている。また水田魚道工に関しては水路と水田とのネットワークを確保するためにポリエチレン管(直径150ミリ)を6箇所設置したが、田んぼ内に試験的に設置された改良柵の中にはドジョウ、シマドジョウ、カワムツ、およびタモロコの4種の遡上が確認されたとのことである。

こうした事例は極めて些細なことのようにだが、生物多様性保持のためには重要な一歩であり、広く他地域にも経験が共有されていく必要があると思われる。

落合地区などの近隣地域では最近、圃場整備が行われたこともあり、農地・水の組織なども数多く作られて来ている。こうしたグループが「水田、魚道工」など生物多様性を守るための取り組みの経験を共有していければ大きな力となって行くのではなからうか。

ただ、一方で圃場整備事業の工法に関しては、問題が残る。今回の調査でも一般工法の区間では生物多様性が極端に損なわれているケース(カエルの幼体調査など)が、はっきりと示されている。国家戦略として「生物多様性の主流化」を言うのであれば事業の「主体」としての農水省は生物多様性の保全のために、これまでの工法の根本的な見直しと転換を早急に開始する時期に来ているのではなからうか。

(森)

# 奥日光ミーティング

～ 奥日光の魅力の“今”を、みんなで考える～ に参加して

2月2日に開催された「奥日光ミーティング」(主催：環境省・関東地方環境事務所・日光自然環境事務所)に参加してきました。

課題は、①奥日光地域の外来植物、②中禅寺湖の適正利用、③奥日光地域の協働型管理のあり方です。ミーティングという形式なので、環境省からの現状説明の後、参加者からの意見交換を中心に専門家のコメントを加えるという形式で進行了。

「① 奥日光地域の外来植物」は国内の移入種に対して、白根山の「コマクサ」、小田代原の「ニッコウキスゲ」、奥日光の「クリソウ」を取り上げていました。国内の、しかもある程度近くに生息していたり高山植物であったりしても、本来その場所にはない植物が人工的に持ち込まれたとしたら、元々の生態系が壊される可能性があります。特別保護地区のある奥日光での、このような問題は以前から気になっていたのも興味深く聞きました。これらの植物がそもそも外来植物であるのかが議論の中心となりました。国内の移入種となると、その真実をさぐるのはとても難しいことだと思知らされました。

今回はいろいろな意見や考え方が出され、結論を出せる内容ではありませんでした。が、手遅れになる前に対応が必要だと思いました。

「② 中禅寺湖の適正利用」では動力船規制が話題になりました。現状の中禅寺湖では、ある程度の動力船規制がありますが、モーターボートの音がうるさいとの苦情もあります。環境省では昨年9月に「中禅寺湖ワークショップ」と称してセーリングカヌー(カヌーに帆をつけて風の力で走る)体験等を行いました。カヌーが浮かぶ光景は自然ともマッチしてゆったりしたリゾート地にふさわしいと思いました。

「③ 奥日光地域の協働型管理のあり方」では専門の先生より、実質的に協働型管理のノウハウが地域で共有され、実績が蓄積されていること、これから考えるべきなのは、個別の問題・課題を超えた総合的な奥日光の課題・問題を考える「場」の構築、コーディネート機能を持った事務局、ビジョンの策定等であるとの講義がありました。

「協働」は最近よく言われる言葉ですが、いろいろな主体やステークホルダーが関わるために合意形成が難しいところです。今回開催されたミーティングのような「場」が今までは少なかったもので、これを機会に現実的な進展を期待したいと思います。

(毛塚)

## 行川の川虫展示

### 報徳今市振興会館まつり

日光市のNPO、「はばたき」、「おおきな木」、「なんとなくのにわ」などが合同で企画した秋祭りに参加しました。

水の会は前日に行川で収集した川虫を展示。科学おもちゃや科学手品のデモンストレーションなども並行して行われ、子どもにも大人にも楽しい集まりになりました。

(右記事：下野新聞 2012年11月5日付)



関係者らでにぎわった報徳今市振興会館まつり

子ども連れなどで訪れた人たちは、趣ある建物の内や外で豚汁やコーヒーを味わいつつ、生演奏に耳を傾け、思い思いの時間を過ごしていた。

報徳会館閉館へ感謝込めまつり  
【日光】報徳今市振興会館まつりが4日、今市の同館で開かれ、秋晴れの中、関係者らがバザーや飲食、バンド演奏などを楽しんだ。同館は、二宮尊徳没

後100年の記念事業として1955年、元三菱銀行頭取で旧今市の名誉市民加藤武男氏が寄付した邸宅を、今市報徳役所跡に移築して開館。現在の場所に計画される尊徳記念館などを備えた新施設の整備で、取り壊される方針となっている。催しは、同館を管理するNPO法人おおきな木、館内で不登校の子どもへの支援活動を行うNPO法人など多くの団体が参加し、同館への感謝の気持ちを込めて開かれた。



- 7月25日(水) 「だいや川通信」第33号発行
- 8月22日(水) NPO和音「川むしたんけん隊」(田川)
- 9月26日(水) 定例会
- 10月24日(水) 定例会
- 11月4日(日) 「報徳今市振興会館まつり」に参加  
行川の川虫展示
- 11月28日(水) 定例会
- 1月26日(土) 新年会

## 薪ストーブの灰

薪ストーブで暖を取ると灰が残る。ブリキの缶に数日保管してから庭や畑にまいていた。一昨年は放射能汚染の様子がよくわからず、薪ストーブは使わないことにして、仕方なく灯油で冬を越した。積んである薪をいつまでもそのままにはできない。周囲に捨てるわけにもいかない。原発事故から1年半経ち、飛散した放射性セシウムの出す放射線量は、はじめの70%に減っているはずだ。今回の冬はストーブに火を入れることにした。

残った灰は用心して扱わなければならない。30リットルくらいのオイル缶を自動車修理屋さんからもらって灰の保管容器とした。家の周辺は手持ちの簡易線量計によると0.08マイクロシーベルト毎時。灰をいっぱいに入れた缶の上に持っていくと、表示値が0.3を超える。放射能の濃縮が起きている。こんなものを車に乗せて移動してよいものだろうかと思いながら1kgの灰を袋に入れ、放射線を測定してもらった。キログラムあたり約8,000ベクレルの放射性セシウム、自然由来のカリウム40も2,000ベクレル検出された。昨年、日光市は薪ストーブ灰を回収する。さっそく電話で予約した。ただし、4月半ばまでどこかで管理しなければならない。放射能の出すガンマ線は、コンクリートブロックくらいでは止めることができない。ブロックを10個ほど重ねた壁で覆えば遮蔽できるのだろうか。現実的ではない。とりあえず、家から離して管理している。

原発事故以前、放射線量や被ばく量をあらわす「ベクレル」や「シーベルト」という単位は、専門家の議論でしか使われなかった。それが日常的に飛び交う言葉になってしまい、簡易線量計が量販店で販売される世の中が変わってしまった。それにしても、放射能や放射線の話はわかりにくい。わかりにくさが誤解を生む。

理解が難しい理由はいくつかある。まず、放射能を出している原子核というものが感覚を超えた微小なものであり、物質は膨大な数の微小粒子の集まりであることにあたる。物を構成する原子は、1億分の1センチメートルくらいの大きさである。1円玉はアルミニウム原子でできているが、その全原子数を表現すると、「2」のあとにゼロを22個書くことになる。ひとつひとつの原子の中心に、原子の大きさの10万分の1くらいのサイズをもつ原子核がある。

放射線を出す原子核は自然界にはごく微量しか存在しない。ところが「原子炉」という、ウランを核分裂させるための容器の中では、反応の結果、不安定な原子核が大量にできる。不安定な原子核を含む物質を放射性物質または放射能とよぶ。放射能はエネルギーを放出し、通常の

### 郵便振替口座

00140-4-535550

### 連絡先

〒321-1102 日光市板橋1732-1 森方

### 今市の水を守る市民の会

0288-27-2183 (8時~17時:森)

0288-26-3324 (17時~21時:塚崎)

<http://somesing.net/daiyagawa/>



薪ストーブの灰の保管場所。  
周辺は空間線量が上昇する。

安定な原子に変化する運命にある。放出されるエネルギーのかたまりがベータ線、ガンマ線などとよばれる有害な放射線である。「ベクレル」や「シーベルト」はこのような微小世界のイメージと関連している。

原子の世界でのさまざまなできごとについて、「あすればこうなる」という断定的な予測が成り立たないことも混乱のもとである。そうなるのは私たちの知識が足りないからではなく、微小世界での予測は確率的であることが本質なのだ。同じ量の放射線被ばくであっても影響は断定できず、確率的な予測しかできない。だから「直ちに影響はない」という言い方も成り立つ。毒物の致死量のようなイメージと本質的に異なるのが放射能の害である。

放射線量、放射線量の測定も複雑な問題である。放射線測定器は放射線の本数をかぞえ、入射時刻を記録し、測定器内で放出したエネルギーを計る装置である。それらはすべて電気信号として出力される。検出器からの情報は複雑なフィルタ処理や計算処理を経て「ベクレル」や「シーベルト」という数値に変換される。しかも、測定器そのものの検出効率による補正が必要であり、さらに宇宙線や自然放射線のバックグラウンド、電気回路から発生する雑音などを差し引かなければならない。

問題点を列挙しただけで紙数が尽きた。原発事故によって、私たちはこのやっかいでわかりにくい放射能と長い間つきあっていくことになってしまった。もし事故が起きなくても、そう遠くない未来に、原発が作り出した放射能があふれ、置き場所に困る事態が起きたかもしれない。放射能や放射線の性質を学ぶことが、自分や周囲の人々の身を守ることにつながる。そんなことを考えながら、放射能と放射線の勉強会をあちこちで開いている。希望される方は本会事務局宛に連絡ください。(手塚)

編集後記 ■「ノロ」だったのか「インフル」だったのか、ちょっと体調を崩し、編集が滞りました。陽射しは明るくなってきたけれど、まだまだ寒い2月です。体調管理を心がけ、杉花粉にも注意して春を迎えたいと思います。今年もどうぞよろしくお願いいたします。